

ケアラー専門職の心のありよう

ー仕事の介護と親の介護の両立についてー

岩井 佑佳音 社会福祉法人 聖隷福祉事業団 聖隷厚生園讃栄寮

〔共同著者〕秋山 恵美子 聖隷クリスファー大学 社会福祉学部

キーワード

ケアラー専門職、介護離職、親の介護、両立支援

I 序章

1. 研究の背景と目的

現代日本の人口構造の変化を特色づけるのは「人口構造の高齢化」である。65歳以上の老年人口は、1960年代以降になると増加の傾向をみせるようになった。とりわけ1980年代以降では急速に高齢化のスピードを上げている（下山昭夫2008）。今後、少子高齢化が一段と進み、要介護者が大幅に増え、多くの労働者が老親の介護に直面することが予想されている。そうした中、介護は育児と異なり突発的に問題が発生することや、介護を行う期間・方策も多種多様であることから、仕事と介護の両立が困難となることも考えられる。現在、家族の介護を理由に離職する労働者は年間10万人超といわれる。調査では、男女ともに介護離職者の5割強が「仕事を続けたかった」と回答している（厚生労働省2013）。離職後の負担についても、精神面・肉体面・経済面のいずれも減ることはなく、「むしろ負担が増えた」との割合が高い。調査結果からは、介護による離職は、働く人の人生設計を本人の望まない方向に変えたり、

家計が不安定になったりする可能性のあることが明らかになっている。

近年は介護サービスを提供する側においても、介護離職が増加している。「2012年以降、介護分野では2016年を除いて毎年約1.0～1.6万人が介護離職しているのである。2010年を基準とした介護離職者数の長期的な伸びを見ると、介護分野の介護離職者の伸びが産業全体のそれを上回っている。したがって、介護分野では一般よりも深刻な介護離職が生じている」（石橋2019,p.2）。また、介護職と家族介護の両立については、「続けることができると思う」という回答は全体の4分の1にとどまり、「続けられないと思う」「分からない」が多くを占めている（介護労働安定センター2018）。したがって、多くの介護労働者は仕事と介護の両立に自信がないということである。介護業界は以前から人材の確保が難しい業種である。人手不足により必要なサービスが提供できなくなった場合、家族の介護負担が増大し、仕事と介護の両立を図ることが困難になる。現在介護をしている有業者は346万3000人（男性：65.3%、女性：49.3%）である（総務省2018）。「これらの人の多くは、要介護者が何らかの介護サービスを受けてい

るから仕事を継続できていて、現状よりも介護の負担が増した場合には離職せざるを得なくなる者も少なからず存在すると推測される」(内匠 2014,p.55)。従って、介護職の介護離職が進むことは、経済的観念からも大きなマイナスである。

一方で、介護労働者のうち「現在、介護している」と回答したものは全体の約1割存在しており、仕事としての介護とプライベートの介護を両立している、所謂『ケアラー専門職』も確認されている(ただし、要介護者を親に限定した調査ではない)。しかし、ケアラー専門職に焦点を当てた記述は雑誌の記事やインターネット上のコラムにとどまっている。

ケアラー専門職についてインターネット等で調べてみると、自身が介護職でありながら親への介護がうまくいかないというプロであるが故の悩みが存在することが分かった。そこで、ケアラー専門職特有の感情に焦点を当て、現職の介護職の方が親の介護と仕事としての介護をどのように両立させ、双方の感情を譲り合っているのか、また今後親の介護を担うであろう介護職員の方々の思いや心積もりについての調査研究の着手に至った。

本研究の目的は、現状研究の題材として取り上げられていないケアラー専門職の存在、特有の葛藤があることの周知を図ることに加え、ケアラー専門職の仕事と親の介護の両立支援に必要な方策の手がかりとすることである。

Ⅱ 調査対象と調査方法

1. 研究対象

近隣の社会福祉法人2箇所に勤務する介護職員176名を調査対象とする。

2. 調査期間

2020年7月1日～7月14日

3. 調査方法

- (1) 施設に調査への協力を依頼する。
- (2) 協力の承諾が得られた場合には無記名式の質問票を施設に届ける。
- (3) 調査対象施設に勤務する職員に対して、自作のアンケート調査を行う。
- (4) 一定期間後、施設を訪問又は返送にて回収する。

4. 倫理的配慮

調査対象となる介護職員に対して文書により研究目的や調査内容について説明した。加えて、回答しないことによる不利益は生じないこと、自由意思による参加、同意の撤回、個人情報・プライバシーの保護について質問票の冒頭に明記した。

5. 分析の方法

データ分析方法として回答項目の集計を行いグラフ化した。質的回答についてはカテゴリー分けを行い示した。

Ⅲ 結果

アンケート調査は留置法とし、近隣で施設長の協力の承諾をいただけた施設AとBに対して、調査目的や内容を説明し承諾を得たのち、配布通数を聞き取り176通のアンケート用紙の配布を依頼した。施設長より各介護職員に配布、後日訪問し176通のアンケートを回収した。結果100%回収率であった。

1. 調査対象者

性別は、男性が63人(36%)、女性が113人(64%)であった。年齢は、全体の平均が39.2歳、男性の平均が35.4歳、女性の平均が41.1歳であった。勤務先種別は特別養護老人ホームが140人(79%)、ショートステイが18人(10%)、介護老人保健施設が7人(4%)、サービス付き高齢者住宅が7人(4%)、デイサービスが3人(2%)、無回答が1人(1%)であった。

2. 親の介護について

(1) 自分の親を介護しているか

「現在、ご自身の親(義理の親を含む)を介護している」の回答は、現在、介護している人が9人(5%)、ここ数年のうちに可能性がある人が44人(25%)、当面ない人が117人(67%)、すでに他界していると答えた人が6人(3%)だった(図1)。

〈以下、「ここ数年のうちに可能性がある」または「当面ない」と答えた人のみの質問項目〉

(2) 自分の親を介護したいか

「もし自分の親に介護が必要になった場合、自分は進んで介護を担いたいと思う」の

回答は、強くそう思う人が40人(24%)、まあそう思う人が76人(46%)、あまりそう思わない人が35人(21%)、全くそう思わない人が9人(5%)、無回答が7人(4%)だった。

(3) 介護技術は親の介護に役立つと思うか

「自分が職場で行っている介護技術は、親の介護にも役立つと思う」の回答は、強くそう思う人が86人(52%)、まあそう思う人が72人(43%)、あまりそう思わない人が4人(2%)、無回答が5人(3%)だった。

(4) 親に対してプロの対応ができるか

「もし親の介護に関わるようになった場合、普段仕事でご利用者に接する時と同じような態度で介護できると思う」の回答は、強くそう思う人が7人(4%)、まあそう思う人が38人(23%)、あまりそう思わない人が85人(51%)、全くそう思わない人が32人(19%)、無回答が5人(3%)だった(図2)。

(5) 現在介護をしていない職員に、『ご自身の親を介護すること』に対する思いを自由にご記入ください』という質問によって質的回答を得た。

図1 自分の親を介護しているか

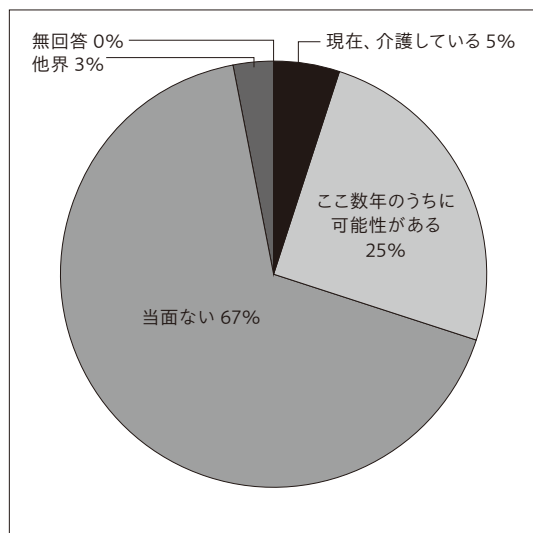


図2 親に対してプロの対応ができると思うか

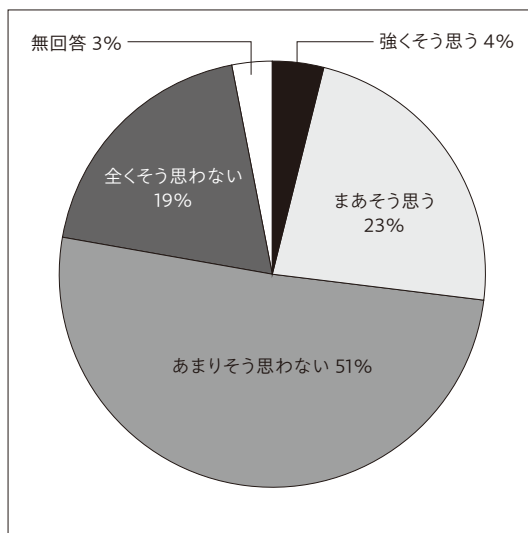


表1 親に対してプロの対応ができると思うか「①そう思う」「②まあそう思う」の選択理由

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
介護職としての経験から	介護への理解	全く介護や認知症に関わったことがない人よりは受け入れられると思う 親も介護の世界で働いていたのでお互い理解があると思う
	相手への配慮	この仕事によって相手の気持ちを理解できるようになっている 相手の立場に立って考えることを意識しているため、利用者也家族も同じ対応をすると思う 介護を受けるというのは親としても抵抗があると介護職として理解している 親からすれば恥じらいがあると思う
	利用者も親も同じ	親も利用者も人としての尊厳は同じ 家族であっても介護を受ける利用者という認識 普段から利用者に対しても親の介護だと思って接している
親への慈しみと葛藤	親への愛情・恩返し	大事な人だから 親が好きだから 今まで育ててもらった恩を返そうと思うから 母子家庭で苦労して育ててもらったので恩返しのつもりで介護したい 自分に愛情をこめて育ててくれたから
	難しさもある	冷静に考えることが身内だと難しい 身内なので互いに我慢できないところはあるかもしれない きつい言葉になってしまうかもしれないが、自分自身で反省すると思う 他人と身内の関係性は違うため全く同じようにはできない 認知症の場合受け入れられるか不安

表2 親に対してプロの対応ができると思うか「③あまりそう思わない」「④そう思わない」の選択理由

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
親の介護と仕事の介護の違い	親には感情的になるから	身内には甘えも出る 家族だと私情が入る。複雑な思いが表れると思う 親となると感情が大きくなり冷静に対応できなくなる。仕事だから割り切ることができる 利用者へは冷静に対応できると思うが親に問題行動があったら感情的になってしまう これまでの関係性から感情的になってしまう 親だとも互いに感情的になってしまったり、逆に伝えにくかったりする。冷静な対応や判断がスムーズにいかない 感情が強くなると思い、直接介護はしない方が良く考えている 認知症が発症している場合人格が変わることもある。身内である場合怒りや悲しみの感情が先に出てしまう恐れがある 身内であること、育ててくれた人という感覚の中で感情のコントロールができるか不安 自分の親に介護するのは恥ずかしさがある 自分の親だから強く言われたら怒ってしまう
	元気な頃を知っているから	元気な頃を知っているから介護が必要になったことを認めたくない 親はしっかりしているイメージから、頭では分かっているけど家族として受け入れられるか不安 元気な頃を知っているから「なんでこんなことが出来ないんだ」と強く接してしまうかも
	関係性が違うから	親は利用者より近い立場だから態度は強くなる 身内と他人では過ごした時間が全然違う 親とは分かり合えるところと分かり合えないところがある

〈以下、現在、介護している」と答えた人のみの質問項目〉

1. 回答者の基本属性

現在、介護していると回答した介護職の性別は、男性が1人、女性が8人だった。

年齢は、20代が2人、30代が1人、50代

が3人、60代が3人だった。就業形態は、正社員（フルタイム）が3人、正社員（短時間）が1人、非正規社員（フルタイム）が4人、非正規社員（短時間）が1人だった。

2. 親の介護状況

(1) 介護している親の続柄

表3 自分の親を介護することへの思い

介護する理由	親への感謝・恩返し	・大変だとは思いますが恩を返すつもりでやろうと思う ・育ててくれた感謝の気持ちをもって介護したい ・育ててもらった分の感謝と親孝行のチャンスだと思う ・親には子供を見てもらった恩がある
	子の役割	・育ててくれた大切な両親を介護するのは当たり前 ・親は子、子は親を看るのが当たり前というイメージ ・自分の親を最期まで看るのが子の役割 ・父子家庭で一人っ子であり、他に親を介護する人がいないので可能性がある ・実家に独身の兄がいるが男性で気づきが少ない点、自分がこの仕事をしていることもあり自分が面倒をみようと思っている ・長女なのでやらなくてはいけない ・他人に任せることに少し抵抗があるため自分で介護したい ・自分がしたことが自分に返ってくると思う
親の介護に対する不安・抵抗感	自信のなさ	・できるだけ介護したいが不安でいっぱい ・やれることをしたいが現実的にできるか不安 ・親を介護する自信はない。身内を介護することは厳しい ・自信がなくどのように対応したら良いか分からない ・自分の子供もまだ小さいため今すぐに介護が必要になったらどうしようという悩みがある ・自分の子供も発達障害を持っているため精神面で心配 ・自分自身の健康状態に不安があるためサービスを利用するしかない ・兄弟としっかり話し合えるか不安
	抵抗感	・自分で介護は抵抗感がある ・身体介助はどの家庭でも抵抗があると思う ・排泄介助は抵抗がある ・状態が落ちていく親をできれば近くでみていたくない ・自分の親が老いていくのを見たくないのも施設に入れてしまうかもしれない ・できるならやりたくない。見たくないものを見たくない ・できれば介護したくない ・介護職でも親の介護をしたい人としたくない人がいると思う
親の介護における望み	介護職の知識を活かしたい	・働いて学んだ知識を活かしていけたら良い ・仕事で身に着けた知識でサポートしたい ・持っている知識、経験からベストを尽くしたいという思い ・専門職として遠慮なく意見を述べていきたい
	親の気持ちに配慮したい	・「介護する、される」という概念はなるべく出したい ・本人の声に耳を傾けることを大切にしたい ・親のプライドを傷つけないようにしたい ・親の気持ちを理解し優しい心で介護したい ・親に「申し訳ない」と思わせない努力をしたい ・本人の希望通りの暮らしをさせてあげたい ・本人の気持ちを一番考えて自由に暮らすことが出来るようにしたい ・長年見てきた親の好みや性格、思い等に配慮した環境を作っていきたい
	後悔のない介護	・自分の後悔がないよう尽くしたい ・心に余裕を持ち、後で後悔しないような介護をしたい ・親が望むならできる限りのことをしたい ・親は「迷惑かけたくない」と言っているが出来ることはやってあげたい ・可能な限り介護してあげたい ・必要になったら最善を尽くしたい
	自分の生活も大切	・親の介護をすることは構わないがそれに囚われたくはない ・自分の生活環境と経済面とを兼ね合いにかけて最善の対応をしたい ・自分のことも大切にしたい ・多少は協力するが自分にも家族がいるため介護は極力少なくしたい ・プロに任せたい。子どものことで精一杯 ・距離感がほしい ・適度に離れて自分の生活が出来るなら看ることはできる ・お互いに適度な距離が必要 ・仕事ではないから8時間関わらないうちで出来ることを考えたい

	家で介護したい	・施設で働いているが親は自宅で看取ってやりたい ・家では一人のため大変だができるだけ家で介護したい ・できる限り住み慣れた場所で最後を過ごしてほしい ・在宅を親が希望するなら仕事より優先したい ・施設でも良いと思うが親が自宅を希望すれば家で介護したいと思っている
	サービスを 活用したい	・サービスを利用しながらできる範囲で見ていきたい ・徐々にサービスに慣れ、状態が落ちたら入所してほしい ・仕事での経験を活かしながら介護するが、介護度が高くなったらサービスを利用する ・介護には限界があると常に思っている。在宅で看られなくなったらサービスを受けて、負担のない生活を本人にも家族にも送ってもらいたい ・サービスを利用し、介護頻度が少なくなる方法を考える ・施設などを活用して互いに負担にならないようにしたい
	プロの介護に 任せたい	・親の介護は施設に任せたい ・やむを得ない事情がない限りは施設に入所してほしい ・プロに任せたい。他人の方が良い介護ができる ・良い施設があればそこが一番良い ・自分が行うより体調面等施設で管理された方が本人たちも気楽だと思う ・施設に入居してもらった方が家族間の関係もうまくいくと思う ・互いに良い関係を保つためにも専門の人に任せることは恥ずかしいことではないという認識を持ってほしい
	親への望み	・できることは自分でやってほしい ・いつまでも元気でいてほしい ・寝たきり等にならず在宅で生活してほしい ・親が元気なうちに老後のことを話し合って決めたい
その他	介護への迷い	・親を最期まで介護することが本当に良い選択なのか、施設で働くようになってから考えるようになった ・育ててくれた親に対して今度はこちらが協力することが必要だと思う。だがそれが直接介護することかは分からない
	職業選択	・親の介護をするにあたって正しい介護をしたくてこの仕事に就いた ・親を介護するために介護士を目指したためできれば良い
	仕事との両立	・仕事と介護の両立は大変だと思うがそれでもやっていきたい ・親の介護ができるかできないかは、仕事が続けられるかどうかで決まると思う ・親の介護もしたいが仕事も続けたい。不安も大きい ・認知症の周辺症状が出てしまったら仕事と在宅介護の両立は厳しいと思う
	家族の負担	・「親を介護する」というと聞こえは良いが家族の負担は大きい ・自分の親が訳の分からないことを言ったり、こちらのことを理解してくれなかったら辛いと思う。「なんで自分の親が」と認められない気持ちになると思う ・身内の介護は大変だと思う。24時間気を張っているのはとても疲れると思う
	仕事とは違う	・仕事としての考えではなく家族としての考えになると思う ・仕事にできても家での介護は大変 ・親子だと甘えが出る。本人が出来ることもやってほしいと言われると思う ・近い存在だけに難しいと思う ・仕事で行っていることと家族を介護することは意味が違ってくる

介護している親の続柄は、実父が2人、実母が3人、義理の父が1人、義理の母が2人、無回答が1人だった。

(2) 介護認定状況

介護認定状況は、要支援2が1人、要介護1が2人、要介護2が1人、要介護3が2人、要介護5が1人、申請無しが1人、無回答が1

人だった。

(3) 介護を要する親との同居について

親との同居は、同居している人が2人、別居（施設を含む）が6人、無回答が1人だった。

(4) 自分以外に親の介護に協力している身内について

自分以外に親の介護に協力している身内の

人数は、1人が4人、2人が2人、4人が1人、協力者はいないが1人、無回答が1人だった。

(5) 親の介護に関わっている頻度

親の介護に関わる頻度は、ほぼ毎日が1人、週に2日～4日が3人、週に1日が2人、月に1日～3日が1人、その他が1人、無回答が1人だった。

(6) 親の介護に関わっている時間

親の介護に関わっている1日当たりの時間は、必要な時に手を貸す程度が6人、2～3時間程度が1人、その他が1人、無回答が1人だった。

(7) 介護保険サービスの利用状況

介護保険サービスの利用状況について、非常に満足である人が1人、まあ満足である人が5人、介護保険サービスは利用していない人が1人、無回答が2人だった。

3. 親を介護していることについて

(1) 親の介護は自分の望みである

「親の介護を担うことは、自分の望みである」の回答は、強くそう思う人が3人(34%)、まあそう思うが人1人(11%)、あまりそう思わない人が3人(33%)、無回答が2人(22%)だった。

(2) 介護技術は親の介護に役立っている

「職場で行っている介護技術は、親の介護にも役立っている」の回答は、強くそう思う人が1人(11%)、まあそう思う人が6人(67%)、無回答が2人(22%)だった。

(3) 親に対してプロの対応をしているか

「普段仕事で接している時と同じような態度で、親に対して介護している」の回答は、強くそう思う人が1人(11%)、まあそう思う人が1人(11%)、あまりそう思わない人が5人(56%)、無回答が2人(22%)だった(図3)。

『(3) 親に対してプロの対応をしているか』選

択理由

強くそう思う人、まあそう思う人の選択理由としては、「今まで大切に育ててくれた恩返しをしたい。体の衰えに辛いところもあると思うので、内心を理解したい」「やることは変わらないから」という回答があった。

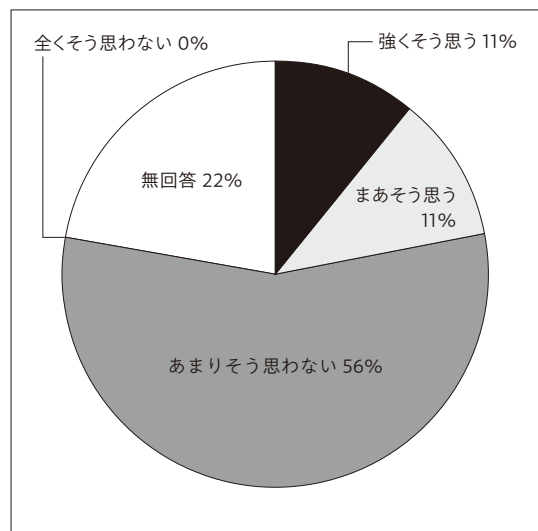
あまりそう思わない人の選択理由としては、「仕事の延長にしたくない」「家族に対しては、どうしても自分で出来ることは時間がかかってもやらせたい。優しさが欠けてしまう」「入居者と自分、親と自分の関係性は違うから」「身内なので、普段通り砕けた形で関わりをしている」という回答があった。

IV | 考察

本研究では、アンケート調査によって現役介護職の方で仕事と介護の両立をしている人がいる場合にその現状や心のありようについて明らかにすることに加えて、将来親の介護をすることに対する介護職の認識を明らかにすることを目的とした。

今回の調査で、介護職176名のうち9名、男

図3 親に対してプロの対応をしているか



性1人、女性8人で全体の5%が現在親の介護をしていると回答した。介護労働安定センターの調査では、「現在介護している」と答えた介護労働者が12.3%存在したとと比較すると数は少なかった。今回の調査対象者が訪問介護職員等と比較して平均年齢の低い施設介護職員のみであったことや、要介護者を親に限定していたことが一因として考えられる。非常に少人数であったため結果を一般化することはできないが、貴重な回答から考察を行う。

1. ケアラー専門職の傾向

今回の調査におけるケアラー専門職の傾向としては、「親とは別居し、介護保険サービスや身内の協力を得ながら短時間の介護をしている」ということがデータから読み取ることができた。先行研究でも、「親と同居すると介護労働の当事者となるため介護に携わる時間が長くなり、離職につながりやすい」(力石2015,p.24)と報告されている。また、親との同居は介護の時間が長くなるだけではなく、仕事から帰ってきても気を休める時間が短くなってしまうという状況が考えられる。今回の調査でも、「以前仕事と親の介護を両立していた時期がある」と答えた方から、「在宅介護をしていたが、仕事で疲れて帰ってきたときは親にきつく当たってしまった」という声があった。親との同居を考える理由は人それぞれ異なるが、仕事との両立を考えた時には、自分の心を休めたり、気持ちを切り替えるという意味でも一定の距離感が必要であると思われる。かつては同居介護が当たり前とされていたが、今は介護の社会化が推進されたことにより、選択肢は増えている。今回親の介護をしていると回答した9名も、今後親の心身状態が低下した際には介護負担の量が変化して

いくことも考えられる。しかし要介護度に関係なく、自分の生活状況に応じてできる時にできる介護をするという選択を可能にするための介護環境を整える必要があると考える。

2. 「親の介護をすること」への介護職の思い

今回の調査では、親の介護に至っていない介護職がほとんどであった。そのため、将来親の介護をすることについてどのように捉えているのかという点を中心として、興味深い回答を多く得ることができた。

『自分が職場で行っている介護技術は親の介護にも役立つと思う』では9割以上の人がそう思うと答えており、技術面においては親の介護でも力を発揮できると考えている介護職がほとんどであることが分かった。これは実際に、ケアラー専門職も技術は親の介護に役立っていると回答しており、介護に関する事前知識と技術を持っている点は、介護職の大きな強みだと言える。

しかし、『もし自分の親の介護に関わるようになった場合、普段仕事でご利用者に接する時と同じような態度で介護できると思う』では、約7割の人がそう思わないと答えており、多くの人が親に対してプロの対応は難しいだろうと考えていることが分かった。その理由として特徴的であったのが、「仕事の介護と親の介護は違う」というものである。具体的には、「親には感情的になってしまう」という記述が多く見られた。そして感情的になる理由としては、「元気な時を知っているから介護が必要になったことを認めたくない」という思いや、「過ごしてきた時間や関係性が全然違う」という背景があることが分かった。「親は他人なら素直に感謝できる場面でも、身内なら当然と思ってしまうがち。子の側も親が衰

えていくさまを受け入れられず、どんどん追いつまれてしまう」(島内 2015,p.37)。そもそも介護という仕事自体が感情労働であるが、「仕事としての介護には、利用者の精神状態の安定を目指したり信頼関係の構築を図るために、相手がどのような状況であろうとも、援助者としてある特定の心理状態を維持すべきであるという規則がある」(小林ら 2015,p.218)。そして、『思いやりと優しさ』『明るく親切的な態度』『受容・共感』という理念」(小林ら 2015,p.218)が存在している。だが親の介護は仕事ではなく、日常の中にある。「日常における感情管理は、これまでの関係性が反映されるという点や、強い拘束力がないという点で仕事とは違うため、どうしても嫌な時には怒ったり、感情を顕わにすることができる」(長谷川 2008,p.122)。したがって、仕事と親の介護は精神的に別物であり、そのことを多くの現役介護職は理解しているということが分かった。一方で、『もし自分の親の介護に関わるようになった場合、普段仕事でご利用者に接する時と同じような態度で介護できると思う』でそう思うと回答した人の理由として特徴的であったのが、「介護職の経験による介護を受ける人への理解」と「親への愛情・恩返しの思い」であった。相手の立場に立つことや、認知症への理解、介護を受けることへの抵抗感を理解することを意識するという回答は、専門職ならではの視点であると考えられる。「親に対してプロの対応ができるか」という意図の質問で「親への愛情・恩返し」という理由が表れたのは、親に対して感謝の思いがあるからこそ、介護職として丁寧な対応をしたいという強い思いの表れであると考えられる。ケアラー専門職に対しても、『普段仕事で接している時と同じような態度で、親

に対して介護しているか』という質問をした。その結果、仕事と同じような態度では介護していないと回答する人の方が多かった。つまり、知識面や技術面では仕事の経験を活かすことはできても、心まで仕事のようにはいかないのが親の介護であると言える。しかし、そう思わないとした理由に「仕事の延長にしたいくない」という回答もあり、仕事は仕事、親は親であると理解したうえで、気持ちを切り替えて介護していることが考えられた。

親の介護はまだである介護職に対する、『ご自身の親を介護すること』に対する思いを自由にご記入ください』という質問でも、多種多様な回答を得た。「在宅で看取ってあげたい」「施設に入ってほしい」。「可能な限り介護してあげたい」「できれば介護したくない」。人によって真逆の思いが表れていた。また、印象的であったのは「自信がない」「プロに任せたい」という回答が少なくなかったことである。自身が介護のプロでありながら、親の介護は他人に委ねたいと考える背景には、「自分の子供のことで手一杯」「他人の方が良い介護ができる」「互いに良い関係を保つため」「見たくないものを見たくない」等の理由があった。中には、「親を介護するためにこの仕事に就いた」「持っている知識を活かしたい」という回答もあった。しかし、親の介護においてはあくまでも家族としての考えによるもので、子どもの時の親子関係も影響していることも考えられた。『もし自分の親に介護が必要になった場合、自分は進んで介護を担いたいと思う』では約7割がそう思うと回答していたことから、何らかの形で親の介護に関わりたいと考えている介護職は多い。しかし、そこには家族としての不安な思いもあるということが明らかになった。

3. ケアラー専門職特有の負担

「プロであろうと親の介護においては家族としての考えになる」ことが分かったが、ケアラー専門職にはプロであるからこそその悩みも存在する。宮下(2018)は「介護職でも親の介護に悩んで当然」とし、川内ら(2019)は「介護のプロこそ、肉親を介護してはいけない」と述べている。これらの福祉専門職は、介護のプロが親の介護に悩む理由として主に3つの理由を挙げている。

1つ目は、介護現場の厳しい状況を知っているからこそ利用者としての頼み事がしづらいという点である。人手不足の状況や制度のことなど、知識があるからこそ援助者に言いたいことがあってもためらってしまい、親に我慢をさせてしまうことがあるという。2つ目は、周囲からプロとして見られることのプレッシャーがあるという点である。3つ目は、プロであるにもかかわらず介護がうまくいかない自分を責めてしまうという点である。川内ら(2019)は、プロであっても必ず「母ちゃん、しっかりしてくれよ」という気持ちが出るという。それが、「介護職としてなにをやっているんだろう」「仕事ではできるのに」という敗北感となり、二重に苛まれてしまうと述べる。

また、もう1つ別の問題として、親族の中で介護の担い手として期待されがちだという点を宮下(2019)は指摘する。「家族に本職がいて良かった」と兄弟から介護を押し付けられたり、「他人の介護をするより自分の親を介護しろ」などと言われ退職するケースもあるという。「家族の世話をしたい、一緒に居たいとする情緒的な動機は負担を軽減させる方向に作用するが、外的な役割期待は負担を増加させる」(佐伯ら 1997,p.28)。これらのこ

とから、介護職自身のプロとしての責任感や、周囲の介護職への期待感がケアラー専門職を悩ませるということが分かる。介護職が親の介護に直面した時に追い詰められないようにするためには、「仕事と親の介護は別物である」という認識を、周囲のみならず介護職自身も持つ必要があると考えられる。

4. ケアラー専門職支援－『ケアラー専門職交流会』の活動－

A県『認知症と家族の会』では、定期的に『ケアラー専門職交流会』を開催し、同じ立場の人間同士で悩みを打ち明ける場を設けている。この交流会は、元々はケアマネジャーの家族支援勉強会で、ケアマネジャーには70歳代の人も多く身内の介護をする人が多いという気付きから立ち上げられたものである。今回、代表のA氏に話を聴くことができた。交流会に参加するケアラー専門職からは、上で述べた3つの悩みが実際に聞かれるという。A氏は、「一人では解決しないことも、他の人の考えを聞くことでバリエーションが広がる。自分だけじゃないんだと気づくことができるのが、ピアカウンセリングの力。みんな同じなんだと分かることでゆとりができる」と語る。またこの交流会では家族の話だけでなく、職場の話もしやすい。仕事での悩みや愚痴は、各々の職場では思うように吐き出せないこともあるだろう。親の介護に関することに限らず仕事のことで話せる場所は、仕事と介護の両立をしているケアラー専門職の心強い支えになると考える。そして、ケアラー専門職に限った話ではないが、仕事と介護の両立において重要なこととして、「介護者の力をつける場」が非常に重要であるということも学んだ。A氏は、「制度や認知症の知識がないま

ま介護のために仕事を辞めてしまう人がいるが、情報を持っていれば辞めなくて良いはず」と話す。A県の『認知症と家族の会』では、一般向けの他に企業向けに『仕事と介護の両立支援研修プログラム』を行っている。しかし、企業の理解はまだ不十分であり、必要ないと断られてしまうことも多いという。介護が必要になる前に会社の中で等しく情報を得る機会があれば、望まない介護離職を防ぐことができるのではないだろうか。

5. 介護職が介護離職しないために

仕事と親の介護の両立とは言っても、現実的に可能かどうかは働く環境も影響する。介護職員に対して行われた勤務先の両立可能な環境に関する調査(介護労働安定センター2019)によると、「勤務先の介護休業制度を知っている」「勤務先の介護休暇制度を知っている」と回答した割合が特に低いという結果が出ている。一方、事業者側では約7割が「介護休業や介護休暇を就業規則に定めている」と回答している。ただし、「介護休業や介護休暇の内容や利用手続に関して、従業員全員に周知している」は約3割、「仕事と介護の両立の仕方に関して情報提供や研修をしている」は1割未満と、制度に関して従業員に積極的に周知している事業所は少ない。たとえ事業者側が両立支援制度を定めていても、利用する介護職員に知られていないのであれば制度の意味がない。そのため、事業者側から両立支援制度や相談窓口について知らせる機会が必要であると考えられる。しかし、ただ知らせるだけでは不十分である。両立に関する社内研修等を継続的に行い、職員が介護体制作りを学ぶことが必要である。「介護休業や時短勤務は、直接介護をやりすぎてしまうとい

うきっかけを与えるという意味では、残念ながら介護離職を後押しすることになってしまう」(NPO法人となりのかいご2020,p.51)という。制度を有効活用するためにも、研修等の場が必要なのである。

また、「介護離職は表面的には介護を理由とした離職であっても、その背後では介護分野の働く環境を巡る様々な問題が関与している」(石橋2019,p.7)という指摘がある。石橋は、やりがいや職場の人間関係、雇用の安定性など働く環境に関する項目別の満足度を、「介護に直面した場合に続けられないと思う」、もしくは「続けることができると思う」とする労働者別に比較した研究を行っている。その結果は、全ての項目において「続けられないと思う」が「続けることができると思う」の満足度を大きく下回っていた。すなわち、働く環境の改善は人材の定着を促し、介護職の介護離職防止に繋がると考えられる。

V | 終章

今回の研究で、ケアラー専門職の現状と負担、そして今後親の介護を担う可能性のある介護職の方の思いについて調査し、以下の結論を得た。

第一に、ケアラー専門職の実態として、人数は少数であったが「親とは別居し、介護保険サービスや身内の協力を得ながら短時間の介護をしている」という傾向があった。

第二に、「介護職は親の介護において、技術を活かすことはできるが、精神的な違いにより職場のようなプロの対応はできないと考える人が多い」ということが明らかになった。これは、まだ親の介護をしていない職員と、している職員の間に大きな認識の差はなかった。

第三に、「自身の親の介護において、介護

職でも家族としての気持ちになる」ということが自由記述から分かった。中には、「仕事の経験を活かした関わりをしたい」という回答もあり、介護の仕事が親の介護への自信となる一面もあると思われる。しかし、介護職であるからと言って親の介護に意欲的な回答ばかりではなく、家族としての不安やプロに任せたいという気持ちがあるということが明らかになった。

結果を踏まえ、ケアラー専門職が親の介護への責任感から解放されることの重要性、親の介護で追い詰められないようにするための精神的支援及び仕事と介護の両立支援研修の場の必要性が示唆された。

本研究ではケアラー専門職の回答は全体の

5%にとどまったため、実際に親の介護と仕事としての介護をどのように両立させ、双方の感情を譲り合っているのかという点が十分に明らかになったとはいえない。今後は、対象を最初からケアラー専門職のみに限定し、より現状に即した支援の在り方についての検討が必要であると考えられた。

謝辞

本研究を行うにあたり、お忙しい中快くアンケート調査にご協力くださいました施設介護職員の皆様、仕事と介護の両立の現状についてご丁寧にお話してくださいましたA県『認知症と家族の会』代表のA様に心より感謝申し上げます。

◎ 引用文献・参考文献

下山昭夫 (2008)「少子高齢社会の福祉・介護サービス職」学文社

三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社 (2013)「仕事と介護の両立に関する労働者アンケート調査」(2020年6月15日取得, https://www.mhlw.go.jp/bunya/koyoukintou/dl/h24_itakuchousa05.pdf).

株式会社大和総研 政策調査部 石橋未来 (2019)「介護分野の介護離職問題-両立支援制度の周知と働く環境の見直しが求められる-」(2020年10月20日取得, https://www.dir.co.jp/report/research/policy-analysis/human-society/20191003_021060.pdf).

介護労働安定センター「平成30年度介護労働実態調査」(2020年6月15日取得,

http://www.kaigo-center.or.jp/report/pdf/2019_chousa_kikka.pdf).

総務省「平成29年度就業構造基本調査」(2020年6月5日取得,

<https://www.stat.go.jp/data/shugyou/2017/pdf/kgaiyou.pdf>).

内匠功 (2014)「介護職員の人手不足問題」生活福祉研究 通巻 88 号, pp.54-69.

力石 啓史: 仕事と介護の両立と介護離職に関する調査結果 (2015) (2020年6月15日得, https://www.myri.co.jp/publication/myilw/pdf/myilw_no89_feature_2.pdf), pp.17-27.

島内晴美 (2015)「ヘルパー資格は家族の介護に役立つか」中央公論新社 婦人公論 100 (7), pp.34-37.

小林由佳、長津美代子 (2013)「中年期における親の介護と感情労働についての考察」群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編 第48巻, pp.217-227.

長谷川美貴子 (2008)「介護援助行為における感情労働の問題」淑徳短期大学研究紀要 第47号, pp.117-134.

宮下公美子 (2019)「介護職でも親の介護には悩んで当然です。『理想の介護』にとらわれないで!」介護求人ナビ (2020年6月5日取得,

<https://www.kaigo-kyuujin.com/oyakudachi/topics/53227/>).

松浦晋也、川内潤 (2018)「介護生活敗戦記『親を介護するなら辞めてくれ』が上司の本音?」日経ビジネス (2020年10月20日取得,

<https://business.nikkei.com/atcl/report/16/030300121/031900041/>).

佐伯和子、深沢華子ほか2名 (1997)「在宅介護者の介護動機の構造-統柄との関連に焦点をあてて-」札幌医科大学保健医療学部紀要. 第1号, pp.23-30.

NPO 法人となりのかいご (2020)「介護離職白書-介護による離職要因調査-」

(2020年10月20日取得,

https://www.tonarino-kaigo.org/wp/wp-content/uploads/2020/06/kaigorishokuhkusyo_20200713.pdf).